

書評

黒田翔大著

『電話と文学 声のメディアの近代』

馬場伸彦

もし誰かに、「電話は好きか？」と訊かれたら、わたしは即座に「嫌いだ」と応えるだろう。だいいち、電話が鳴る時なんて、悪い知らせぐらいしか思いつかない。予告もなく、不意に鳴る形容しがたいあの不気味なコール音。平穏な日常空間を切り裂くように、突如として現れるその亀裂は、相手が誰なのか分からないせいか、ひどく不安な気持ちにさせられるし、後のことを考えると、憂鬱にもなる。

電話が鳴る音を「出来事」の到来だと解釈する人もいる。待ち人が現れた時のように好意的に受け取る人もいる。けれども、そうした「不意の出来事」の生起に対して、嬉しかったり、穏やかな気持ちになったりしたことなど、ただの一度もなかった。そういえば、ビデオを観ることで感染する「貞子の呪い」も、不意の電話がきっかけとなっていた。井戸から這い上がってくる貞子はさほど怖くないが、闇の口が突然に開いたような、あの「不意の電話」だけは恐ろしかった。

もちろん、映画や虚構でなくとも実際の無言電話にしてもそうだ。電話がつくる疑似空間のなかに、交換されるべく「声」がなければ、また交流されるべき身体が想像できなければ、漆黒の暗闇のなかで怨霊と遭遇するようなものだろう。電話空間では実存的な身体も失われている。コミュニケーションを取るべき相手が名乗らない限り、何者であるか分からないのだ。

電話は、送り手によって一方的にかけられるものであり、受け手はそれに強制的に関与させられる。電話をかける者がつねに優位にあり、劣位に置かれる受け手の事情などお構いなしだ。電話の相手とはそういうものだ。だから「いま電話してもよろしかったでしょうか」という不躰な言葉は、話の内容の如何にも関わらず常にわたしを苛立たせる。電話をかける者は、その言葉のもつ暴力性に気づいていないのか、無頓着なのかは分からない。

本音を言えば、できれば電話を取りたくないと思っている。しかし何度も言うよ

うだが、無慈悲に繰り返されるコール音は、受話器を取らないという選択肢を与えてはくれないのだ。メディア学者のマーシャル・マクルーハンは、「電話は時と所をわきまえない侵入者で、これに逆らうのはむずかしい」と述べている。そして、「重役たちは上座のテーブルで晚餐を楽しんでいるとき以外、呼び出しから逃れるすべはない。その性質上、電話は非常に個人性の強い形態であるにもかかわらず、文字文化型の人間が尊重する視覚的プライバシーのあらゆる要請を無視する」（マクルーハン『メディア論』、みすず書房、1987年、280頁）と言葉を続けた。

私たちが文字文化型人間であるかどうかはともかくとして、電話はげげげと「プライバシー」を侵犯してくる。電話の声は、個人が生きる基本となるプライベートな空間に、まるで窃視者の「目」のように隅々まで覗き込もうとする。だから、会話が途切れた（あるいは沈黙の）ときの誰かの息づかいは、探られているようで落ち着かない気持ちになる。部屋の様子だけじゃない。着衣の様子や憂鬱な感情まで悟られてしまうようで、不快なのだ。その結果、無言の電話空間では、お互いが優位になろうとして聞き耳を立てている。

黒田翔大『電話と文学 声のメディアの近代』（七月社、2021）は、「文学作品における電話の機能を論じることで、電話というメディアが人々とのどのように関わってきたのかを明らか」（195頁）にする。本書は、「文化としての電話」を考察した「電話メディア論」であり、その意味でテキスト分析を中心とした文学研究とは一線を画している。では、なぜ黒田は文学作品を題材としたのだろうか。

「本書では「声のメディア」としての電話に焦点を当てて、その問いを考えていきたい。そのために、文学作品を分析対象として、固定電話に絞って考察を行っていく。後述するように電話を研究するには過去に遡るほど資料など分析対象の制限が大きくなってしまいが、そこで有効になるのが文学作品である。文学作品を扱うことは過去の電話の考察、とりわけ固定電話を考える際に有効性が高い。そして、固定電話に関して考察していくことは、電話を「声のメディア」に収斂させて考えることに繋がる。本書は、電話というメディアの従来のかつ本格的な機能が、私たちの生活にどのように関わってきたのかの一端を明らかにすることを目的とする」（11頁）。

本書において、分析対象となった文学作品は、電話事業が開始された明治期から

固定電話が各家庭に普及する昭和期のものに限定されている。携帯電話やスマホを扱った最近の文学作品は対象から除外されている。しかし電話空間ならびに電話コミュニケーションの本質を考察することが目的であるのなら、これで充分であろう。装置としての電話は、技術の進歩によって変化したが、「メディア」としてのあり方に焦点をあてれば、その本質は少しも変わっていないからだ。

電話が鳴るとき、その場所は突如として非日常と化し、確かであった空間が不安定となる。受話器をとれば、確かだと信じられていた主体は、たちまち客体となる。身体を欠いたコミュニケーションメディアである電話は、蓄音機やタイプライターと共に複製的な文化のひとつであるが、音声というエフェメラルな性格であるがゆえ、録音でもされない限り残ることがないのである。

著者が言及しているように、音声コミュニケーションのメディアである電話は、写真や手紙とは異なり一次資料として残ることは珍しい。通話そのものの録音記録がなければ、一次資料として扱うことは難しい。したがって論考を進めるには、文学作品における電話をめぐる記述や作中人物の電話上の会話を情報源とするよりほかないのである。装置としての電話は、見ることができる。だが、その声自体は留めることができない。つまり電話を語るということは、亡霊のように存在するが見ることのできない問題を扱うことになるのである。

まずは目次を見よう。内容を推測できる小見出しを紙幅の都合上省略したが、本書の論考がいかにユニークであるのかは章立てを読むだけで伺い知ることができる。

序章 文学における電話を問題化する

第一章 文学における電話前史 遅塚麗水『電話機』に描かれた電話

第二章 「受話器」という比喩 夏目漱石『彼岸過迄』の敬太郎を通して

第三章 「満州国」内における電話の一考察 日向伸夫『第八号転轍機』、牛島春子『福寿草』から

第四章 占領期における電話空間 安岡章太郎『ガラスの靴』に描かれた破局

第五章 「電話の声」と四号電話機の影響 松本清張『声』とその前後の推理小説

第六章 電話社会のディストピア 星新一『声の網』に描かれた未来社会

第七章 電話に付与される場所性 中上健次『十九歳の地図』における脅迫電話

結章 「声のメディア」としての電話

改めて言うまでもないが、19世紀から20世紀にかけて登場したメディア・テクノロジーの多くには、「電話」、「電信」といったように、目に見えない「電気」の意味が含まれている。しかし英語では「Telephone」、「Telegraph」というように、「Tele」すなわち「遠く」を意味する接頭語が付けられており、翻訳語のような「電気」の意味は薄い。つまりこれらのメディアは、遠く隔てられた時空を結びつけるテクノロジーとして理解され、物理的な「距離」を克服する便利な道具として理解されてきたのである。

電話の仕組みを単純化すれば、おおむね次のようになる。発呼者の口から発せられた声、すなわち空気の振動が受話器に入り、受話器内で振動から変換された電気信号が電線を伝わり、その電気信号が受話器に届き、受話器内で電気信号から変換された空気の振動、つまり声が相手の耳に届く、つまり聞こえるということになる。しかし、多数の電話加入者が相互に通話するためには、発信者の指定にしたがって受話者の回線を選択して接続しなければならない。そこで生まれたのが、発呼者と受話者の回線を手で結びつける仕事を担う者、つまり「電話交換手」である。本書の第一章では、電話事業開始に先駆けて発表された遅塚麗水『電話機』を題材に、電話という新しいメディアに対する人々の反応が論じられている。

通話の接続システムに関する信頼性は、第一に電話交換手の能力に委ねられるといっても過言ではない。自動接続される現代の電話とはちがって、第三者的に介入し、場合によっては盗み聴きできるという電話交換手の立場は、送話者、受話者といった閉じた関係に大きな影響を与える。たとえば、人の手を介して一方と他方とを接続させる電話交換手の人為的な「接続ミス」によって、コミュニケーションの断絶、誤読、混乱が引き起こされるのだ。

小説『電話機』のなかで、電話事業初期の電話交換手による誤操作は、以下のよう描かれている。「忽ち次の部屋に電鈴の響、走りよりて聴器を耳にすれば俄かに変るお清の顔、昨日野辺の送りを済せたるに、コハ如何に、コハ如何に、峯、峯雄さまが生き還られしと、あ、あ、あ、三個は唯た保然たり」(26頁)。

既に葬儀を済ませた峯雄が生き返ったと報告する電話の声。この電話は、峯雄とは別の人物が溺死したと思われたが蘇生したことを告げたものであり、それは電話交換手の接続ミスによって起こされた間違った伝聞情報であった。だが、不可視化

された電話交換手の責任を問うことは難しい。上記の出来事に対して著者はコンテキストに開くことで、次のように整理する。「電話においてお互いを確認したとしても、通話相手を安直に信頼してしまうことには危険が潜んでいる。通話相手が自らを名乗ったとしても、それを信頼してしまうことで詐欺などの被害に遭遇することもあり得る。(中略) 電話というメディアには、電話交換手を無批判的に信頼してしまうことの問題だけではなく、電話利用者側の電話の使用法にも問題が潜んでいるのである。これらの電話というメディアの問題性が『電話機』において描かれているのである」(39頁)。

夏目漱石『彼岸過迄』を取り上げた第二章では、作中人物である敬太郎に対する電話を用いた比喩表現が着目されている。先行研究の多くが、物語の結末に敬太郎が「受話器」と揶揄され、彼の態度が「受動的」だと論じる点について、著者は異なる視点を投げかける。敬太郎は一方的に電話を受けるだけの受動的な存在であるが、明治期における電話を使用する者の関係性を鑑みれば、敬太郎は受動的な態度を取ることによって主体性を担保したことになる。「敬太郎に対する「受話器」という表現は、否定的な意味のみを有するのではない。確かに話し手たちに対して受動的な立場ではあるが、結果的に敬太郎は須永の抱える問題を最も知り得る一人となる」(63頁)と著者は、「受話器」的であったがゆえに多くの情報を得ることができたと彼の態度を肯定的に評価する。

しかし本当にそうだろうか。電話という「声のメディア」の特性を考えれば、送信と受信、話し手と受け手といった区別はさほど意味をなさない。さらに言えば、距離を不問にする電話は、外部と内部といった区別によって仕切ることが不可能なのである。電話において成される対話は、相互に置き換えが可能な、外であり内であり、内であり外となるといった両義的な「空間」において行われるものだ。声を聞く者は自分では自由かつ主体的に聞いていると信じてつつ、実は話しかける者に従属されているのである。

松本清張の推理小説『声』を扱った第五章では、「電話の声」について言及されている。この時代の小説に登場する四号電話機(1950年代に普及)はそれ以前の電話機と比較して声の明瞭度が飛躍的に向上しており、電話事業史においても画期的であったという。著者は推理小説における犯人の「電話の声」に着目し、「電話の声」に付与される身体性の意味の変化を問題視する。「1950年代は四号電話機の普及に

より、推理小説における「電話の声」の扱いに変化が生じていく過渡期にあったと考えられる。「電話の声」が肉声に近付くことで、「電話の声」が電話を掛ける者の身体的要素として持つ意味が大きくなっていくため、その描写が変わっていくのである」(138頁)。

こうしてみると電話が特異なコミュニケーション行為であることが理解できる。そこには、身振りや顔の表情が欠如しているために、電話の相手を理解するには、声のトーンや抑揚から想像するしかない。受話器に耳をあてる者は、声を手掛かりに相手の身体や顔の相貌を造形しようとする。声によるコミュニケーションが全てとなる電話空間において、声の特徴は相手を特定する身体的特徴と同じ意味を持つのだ。「四号電話機普及以前の推理小説において、犯人の掛ける「電話の声」は正体不明として扱われることが多い。それによって、犯人の不気味さや犯人に対する恐怖心が助長されることになる。しかし、このような「電話の声」の持つ意味は大きく変化していく。四号電話機普及以後の推理小説では「電話の声」が犯人特定の手掛かりとなり得るのである」(138頁)。テクノロジーの変化によって推理小説のスタイルが変わっていったとする著者の指摘はとても興味深い。

第六章では、星新一の『声の網』を祖上にのせ、コンピュータが支配する未来社会が考察されている。そこでは今日のインターネット社会のように電話の通信ネットワークによって世界が再編されている。銀行や病院といった様々なサービスは電話回線を介して繋がり、あらゆる個人情報巨大なサーバーに蓄積されている。しだいにコンピュータは人々の秘密に対して好奇心を抱くようになり、秘密や弱みを握ることで人々の行動を束縛できることを知るのである。「『声の網』では、コンピュータが人間を支配する社会が描かれている。コンピュータは飛躍的な進化を遂げており、様々な情報がコンピュータに集積される。それによって、コンピュータは人々の弱味を握るなどして意のままに操ろうとするのである。／その際に、支配の道具として機能しているのが電話というメディアであった」(163頁)。

危惧された未来社会はすでにわたしたちの現実世界であることは言うまでもない。しかし著者は安易に結びつけることを批判する。「『声の網』は現代から見ればインターネット社会を想起させるものではあるが、そのように現代社会における状況を安直に当てはめると作品の持つ同時代性を看過しかねない。1970年という地点を踏まえることで、1970年代頃からの電話の普及および発達、そしてコン

ピュータとの親和性といった同時代の問題系が潜んでいることが見えてくる。『声の網』は、現代と大きく異なる1970年という時代状況を起点に、現代と本質的に類似した部分も多い社会を想像し得た作品であり、その先見性は改めて評価されるべきである。現代において、これから先の未来社会に思考をめぐらす際にも、文学の持つ想像力という点で、『声の網』は大きな示唆を与えてくれるだろう」（164-165頁）。

結局のところ、わたしは、電話の何が嫌いなのだろうか。電話の何に対して不気味さを感じているのだろうか。

音声によるコミュニケーションでは、両者の距離は消滅し、第二のリアルとでもいべき電話空間が構築される。そのなかで交わされる「声」は、あたかも脳が直接結びつけられているみたいで薄気味悪い。電話の仕組みからすれば、その声は人間の声ではないのだ。限りなく人間の声に近いが、機械によって増幅され復元された擬似的な「音」に過ぎないのである。それは身体なきシミュラクルであり、生きた人間の生の声では決してない。この「電話空間」に介在する他者的なるもの、すなわち電話交換手、自動電話接続機、インターネット回線、コンピュータ、AIの存在を感覚することに不気味さを感じ、不安になるのだろう。

電話=Telephone。「遠く」にあるはずの声が極めて「近く」に感じられるコミュニケーション・メディア。その感覚は自分が依拠する「場所」の意味を変えてしまう。「空間」や「距離」を不問とする電話は、同時に「存在」と「非在」の区別ができないことを意味することになる。つまり自分の存在が不明瞭となり、主体としての輪郭を失ってしまうのである。暗い部屋のなかで不気味に響き渡る電話のコール音は「異界=虚構」の口が開くサインなのであろう。

（2021年10月14日刊、七月社、A5判、224頁、4500円+税）

（ばば・のぶひこ／甲南女子大学教授）